

## 2012 年度卒業生

### 大学生活を振り返って

渡辺 実果

私の大学生活を振り返ってみると、苦手なこと、嫌なことにも挑戦した 4 年間だったと思います。人見知りや激しかった私は友人ができるかということ、地元を離れ新しい環境で生活していけるかなど本当に不安でいっぱいでした。しかし今では、大学でも気の合う友人が出来、アルバイトの仲間もたくさん出来ました。

人と話すことに苦手意識がありましたが、思い切ってイベントスタッフのアルバイトをはじめたことで、自分が変わったような気がします。はじめのころは、お客様と話すことを苦痛に感じたりもしましたが、様々な現場でのイベントをこなし、徐々に慣れていき、最終的にはお客様とたくさん話したいと思うようにもなりました。さらに、夢の一つであった、お台場合衆国でのアルバイトも経験でき、大学生活最後の 4 年生の夏で 20 人以上の新しい友達もできました。

そしてもうひとつ、嫌だからといって諦めずによかったと思うものは卒論です。私は、特にこれといって取り上げたいテーマもなく、なんとなく卒論のデータ集めや文章の作成をしていました。そんな中、就職活動が思うように進められず 4 年生の後期からはゼミナールをやめようと考えました。しかし藤井先生に「いまやめれば、大学生活を後悔するぞ。」とアドバイスをいただき、考えなおしました。その頃はあまり気が進みませんでした。ゼミナールも卒論も続けることを決め、取り組みました。相変わらずテーマに熱は注げませんでしたが、なんとか提出期限に間に合わせようと作業していました。その後、就職活動も終わらせ、論文も仕上げに入り、終りが見えてきたころ、やっていた良かった、投げ出さなくて良かったと感じました。特に興味のあるテーマでもなく、内容もそんなに良いものではないとは思いますが、すべての作業を終わらせ、期限までに提出できた時、ひとつのことをやり遂げる達成感を、今までで 1 番感じられたような気がします。諦めないように言ってくれたり、論文の指導をしてくれたりした藤井先生、ありがとうございました。

この 4 年間で振り返ってみて、嫌なこともあったはずですが、あまり思い出せません。それも最後には楽しかったという思い出になっています。後輩のみなさんも最後に楽しい大学生活だったと言えるよう、思いっきり楽しんでください。

### ゼミ活動を振り返って

鳥飼 崇嗣

私は、大学 2 年から 4 年までの 3 年間、藤井ゼミに所属していました。この藤井ゼミの活動を通じて、たくさんの方のことを学びました。

年を追って振り返ると、2 年生のころには、渡辺ゼミとの合同プレゼン大会でのことをよ

く覚えています。このプレゼン大会でのグループで、私はリーダーを務め、メンバーをまとめることの難しさを経験しました。また、この経験を通じ、良いグループにするには、リーダーが、メンバーのやる気を高めることのできる環境を作る必要があることを学びました。

3年生のころには、複数の大学との合同プレゼン大会が強く印象に残っています。この活動の中で、品川の商店街の振興組合の方や、中央区市役所の職員の方にヒアリングに行くといった、普段の生活では経験できないことを経験することができました。

4年生では、卒業論文の作成を通じて、自分の情報収集や、物事の追求についての甘さを痛感しました。夏の合宿の際、夜中に先生に物凄く怒られ、落ち込んだことをよく覚えています。しかし、先生の指導を受けるごとに、論文の書き方や、情報収集の仕方がわかるようになり、結果として、卒業論文を提出することができました。

この3年間で、たくさんのことを経験しましたが、全てのことにおいて、つらいと思うことがありました。正直、途中で投げ出したくなる時もありましたが、ゼミの友人や先生のアドバイスによって続けることができ、物事をやり遂げることの大切さを、この3年間で学ぶことができました。

最後に、この藤井ゼミに所属して、本当によかったと思っています。毎年行われるゼミ合宿では、楽しい思い出を作ることができ、また、ゼミの友人との交流も深まり、授業の後には、先生も含め、みんなで飲みに行くといった、勉強以外での楽しみも充実させることができました。また、藤井先生には、とても感謝しています。ゼミでの先生の指導は、厳しく、的確で、自分の欠点を見つめなおすことができました。また、ゼミ以外の飲み会などでは、とても気さくで、話しやすく、とても楽しい時間を過ごすことができました。このゼミでの思い出は、この先、忘れないと思います。この3年間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

## 感想文

中島 佑輝

今、ゼミ活動の事をふと振り返ると、非常に充実した時間であったなあ、と思います。ゼミに入るまでの私の考えとしては、ゼミというのはあくまで大学の講義の補足的な部分を学ぶためのものであり、あまり重要視していませんでした。そのため、最初はゼミの単位が単純に欲しいから履修をしたと言っても過言ではありません。しかし、ゼミで学ぶにつれその考えは大きく変化しました。

ゼミ活動でのグループ活動は私にとって、新鮮であり同時に貴重な体験となりました。グループで調べ、グループで行動し、グループで結果を発表するという一連の流れは今まで経験したことのないものでした。私が抱いていた大学のイメージは、グループというより、個人個人が学びたいことを自由に学ぶというイメージを持っていたのですが、ゼミではその限りではありませんでした。よって、ゼミに入る意義はこのグループ活動にあると思います。

時にはチームの一員として、時にはチームのリーダーとして、様々な事をゼミ活動において行いましたが、すべてがうまくいったわけではありませんでした。意見がまとまらないことや、思うように物事が進まないこと、結果が出ないこと、など失敗に終わってしまったことが多くあります。しかし、グループのみんなと力を合わせて、1つの物事に熱中出来たことは非常に貴重な経験となりました。このグループ活動で得られたものは、いろいろあると思いますが、私が一番大きな収穫だと思っているのは一緒に頑張ることのできる仲間が出来たことです。最初から、全員が全員と仲が良かったわけではありませんし、初めて出会った人とうまくやっていけるのか不安でした。しかし、今ではすっかり気の置けない仲になり、離れ離れになるのが非常に寂しいと感じています。ゼミの仲間は、時には笑い合い、時には競い合い、時には励まし合う、かけがえのない仲間であり、こうした出会いが人を成長させるのではないかと考えます。

私は、この大学に入って良かった、というよりも、このゼミに入れて良かったな、と思うようになりました。ゼミに入る前の自分とは大違いです。共に支え合うことのできる仲間が私を変えてくれました。しかし、それに気付いた時には、もうすでに「卒業」という文字が目の前まで迫っています。それくらいあっという間でしたが、そう感じるということは非常に充実した時間だったのかもしれない。

最後の学生生活で、このような仲間を作ることが出来た藤井ゼミに感謝したいと思います。今後は、ゼミ活動で学んだことを生かして、社会人となっていきたいと思います。

## ゼミナールを振り返って

富田 泰地

大学での4年間を振り返ってみると、とても4年間だったとは思えないほど短い時間だったように感じます。しかしそんな僅かに感じる時間でしたが、今までの人生において最も自分自身を成長させることのできた貴重な期間だったように強く感じています。そして藤井ゼミでの経験もそんな私の成長の貴重な1ページとなりました。

私は他の学生と異なり3年時から藤井ゼミに所属しました。なぜ私が3年時になって藤井ゼミへの所属を志したのかというと、きっかけは2年時に行ったプレゼンテーション対決でのことです。当時他のゼミに所属していた私は、現在のゼミ仲間である藤井ゼミの面々とプレゼンテーション対決を行いました。そしてその中でプレゼンテーションでの内容や結果以上に藤井ゼミの活気や協調性の良さなどを強く感じ、惹かれるように藤井ゼミへの所属を決意しました。

そして3年生になり晴れて藤井ゼミ生となった私でしたが、待っていたのは苦勞の連続でした。中でも最も強く記憶に残っているのが、私が藤井ゼミに所属して一番初めに取り組んだ『学生まちづくりプレゼンテーション大会』での出来事です。私は自ら立候補し責任者を務めながら大会に取り組んだのですが、当初は右も左もわからないような状態であったため、調査方法・ゼミ員とのコミュニケーション・プレゼンテーションへの準備など様々な面で悩みました。更には藤井先生からのお叱りも受けることも度々あり、心が折れ

そうになったのは一度や二度じゃありません。しかしそんな経験があったからこそ、現在の富田泰地が形成され、無事就職活動を終え卒業を控えることが出来たのであると感じます。正直この文章を書いている今も、あと少しで藤井先生やゼミの皆と離れ離れになってしまうのが寂しくて仕方ありません。本当に藤井ゼミに入ってよかったです!!!

そして後輩の皆さんへ。正直藤井ゼミの内容は重く感じることも多いと思います。しかしその山を越えた時の達成感は何のどの授業にも負けません。皆さんも途中で折れること無く取り組み、最終的には私のように先生や仲間と素晴らしい関係を築いてください。

## 大学生活を振り返って

鈴木 徹

大学生活 4 年間はあっという間に過ぎていってしまいました。これまで毎年先輩方の卒業を見送ってきましたが、とうとう自分が卒業する番となってしまいました。本分である勉強面では常に真面目に取り組んだとは言えませんが、一部の授業やゼミに関しては一生懸命取り組んできたつもりでした。就職活動も幸い早い時期に終わり、無事就職先も決まりまもなく卒業という今、私の大学生活を振り返ってみようと思います。

高校 3 年生もまもなく卒業という当時、大学生の自由でのびのびしたイメージに憧れていたのは誰もが皆同じ気持ちだったと思います。私も、中学・高校と野球部に所属していたため、厳しい練習の毎日でした。大学では本格的に野球部に所属というのは全く考えていませんでしたが、野球をするのは好きであったため、野球サークルに所属し楽しく体を動かせばいいなという気持ちでした。

東洋大学に入学し、サークルの勧誘活動が始まると、その数の多さに圧倒されました。真面目に活動をしているところもあれば、ほぼ衰退状態に思えるところもあり、人伝に情報を集めていろいろなサークルを見ていました。野球サークルを探していましたが、なかなか相性の合いそうなサークルに出会えませんでした。しかしその頃同時に、大学生ではなにか、その時だからこそ始められそうな新しいことをしたいと漠然とはしていましたがそのように思っていました。そのため入学当初、サークル紹介ガイドブックに載っていたスキューバダイビングのサークルにとっても関心を持ち、さっそく応募していました。しかし、応募人数多数で代表に連絡した時期も遅かったせいもあり、そのダイビングサークルに入ることができませんでした。そのため入ったのが、パラグライダーサークルでした。このサークルでパラグライダーを始め、飲み会や合宿や旅行など、大学生らしい楽しみ方で充実した日々を過ごせました。また、割と他と比べて小人数のサークルであったこともあり、みんな仲良くでき私にも合っていました。

大学 2 年になった春先、友人から入学当初とは別のスキューバダイビングのサークルを紹介され、私はそのサークルに入ることになりました。年間を通して活発に活動を行っているサークルで、すごくいいところに巡り合えたなという思いでした。器材もローンを自身で組んで購入し、アルバイトをしながら活動資金を貯めました。毎年夏には沖縄合宿というものがあり、沖縄本島、石垣島、与那国島と毎年ことなる場所を訪れてきました。大

学 2 年の時に初めて行った沖縄でしたが、その美しい海や生物、のんびりとした雰囲気ですぐに気に入ってしまいました。また大学 3 年時には、私が石垣島合宿の幹事を務めていろいろと計画を練ってきたこともあり、思い出深いものとなりました。

大学 3 年時には就職活動も始まりました。私たちの年から、企業が採用活動を 12 月 1 日スタートとする最初の年であったため不安でしたが、とことん自分自身を見つめる初めての機会でした。面接等でのアピールの仕方を思考錯誤してみたり、さまざまな人とのつながりがあったため、就職活動は自分自身を成長させられる素晴らしいものだったと今ではそう感じています。

話は変わりゼミの話となりますが、藤井先生を始め、藤井ゼミのメンバーはみんな個性がありいい奴らでした。特に男は少人数で固まることもなく、和気あいあいとした雰囲気です。業界を代表する企業を取り上げて他ゼミとのディベート大会を行った 2 年、品川区の商店街復興のための街づくりプランを考えたり、全国の特産品や観光地について調べ合同プレゼン大会を行った 3 年、そして特にゼミ合宿を通じて、確かにメンバーの絆が深まっていくのを感じました。藤井先生に対しては、2 年生当初、みんな怖いイメージを持っておりましたが、合同ゼミで発表を終えた後の先生からのフォローが嬉しく、私自身もほかのメンバーも、先生へのイメージががらりと変わった時のことはよく覚えていています。

卒業論文も完成することができ、卒業を控えた今、大学生活を振り返ってみると、本当に充実した日々だったと実感できる半面、まもなく終わろうとしている学生生活に寂しさを感じています。

藤井先生、もっと早い時期からみんなでお酒を飲む機会があればよかったですね。昨年先生と数名で白山の居酒屋でお酒を飲んだ時はとても楽しかったです。卒業前に西尾が企画してくれるみたいですよ。(笑)

私にとって大学生活は、いろいろな人と出会いたくさんのことに挑戦できたので悔いはありません。とても充実した 4 年間だったと思っております。これからは社会人となりますが、とりあえずは目の前のことをがむしゃらに一生懸命取り組んで仕事を覚えていきたいと思っています。お客さんを感動させられる家づくりに携わっていけるように頑張ります。

藤井ゼミに所属してからの 3 年間、ご指導ありがとうございました。

## ゼミの感想文

戸谷 英

大学生活を振り返って一番心に残っているのは、大学生活の大半を過ごした部活動です。私は東洋大学に入学する前は、サークルで野球を続けようとしていました。しかし、新入生勧誘時に準硬式野球部の先輩に勧誘され、入部を決意しました。準硬式野球部に入部してからは野球中心の大学生活を過ごし、充実した大学生活を送れました。また、大学 3 年

時から主務という役割もやらせていただき、合宿の計画・実行、大学側への書類の提出などを行ってきました。こんな役割もやらせていただいた準硬式野球部は体育会でもあるので上下関係、挨拶もしっかりしておりこの一部体育会準硬式野球部では部活動に入らず、サークルや何にも入っていなかった人よりも人間的にも成長できたと感じています。今となってはこの一部体育会準硬式野球部に入部しとてもよかったと思っています。また、大学に進学したら必ず避けては通れない就職活動でもいい経験ができました。就活は12月から始まったのですが、私は、部活動もしていたため12月から初めはしましたが本当にしっかりやり始めたのは部活動を引退しました4年時の5月下旬からでした。それまでは就活もしていましたが部活動を優先していたため、どこか中途半端で敗戦続きの就職活動でした。部活動を引退した5月下旬には周りの人たち大半が内定をもらっておりましたが私は全然焦ってはいませんでした。就活では他の人と違う部活動をしていて挨拶や人間形成にかかわることを学べ、人間的にも成長できたことを押しながらやっていきました。その結果8月9日には内定をもらえ、実質1ヶ月半ほどで私の就職活動は終了しました。私が内定をもらった企業は希望していた職種と全く違った職種にはなりましたが内定をもらったのも何か御縁があったからだと思いますので、この企業でこれから頑張っていきたいです。ゼミナールの活動では、私は3年時から加入したのですが、すんなりと溶け込め、ゼミ合宿や他学部と対抗論述大会、他大ゼミの方たちと飲み会をしたなど充実した活動ができたゼミナールでした。藤井先生には短い期間ではありましたがありがとうございました。

## 大学生活を振り返って

神保 宏大

大学生活を振り返ってみるとあっという間に過ぎていった、そんな風に思いました。1年の頃は高校と違い90分授業だったり、複数のサークルに入ったりして今までとは違う環境になれるのに精いっぱい、気が付いたら1年過ぎていました。2年以降慣れてきたら慣れてきたで時間の自分なりの使い方が出来あがって、入学時には4年間は長いと思っていたけど、今では案外短いなって気がします。大学生活で個人的に大変だったのは、ゼミも大変だったけど、それ以前に3年の春にインフルエンザのような熱が出て、一週間寝込んだ時、履修登録期間中に履修登録することが出来なかった時がかなり焦りました。大学に電話して、追加登録期間に登録してくださいと言われ、とりあえずは登録出来たけど、自分がとりかかった授業を取ることが出来ず、授業数が少なくなり、怠け癖がついてしまい単位が取れなくなるのではないだろうか心配になりました。1、2年時にそれなりに単位を取得していたので結果的に何とかなっているものの、その後、怠け癖が治ることはありませんでした。3年までは何があっても単位を普通に取得していれば今よりも多少苦勞することない生活が送れていたのではないかと思うことがあります。過ぎてしまったことなのでどうしようもないわけですが、個人的にこれが大学生活での分岐点だったような気がします。いろいろあったわけですが、次いで印象的だったのはやはり3年間もつづいたゼミでした。その中でも合同発表は嫌な意味で記憶に焼き付いています。発表の練習だからやることに意味があるのはわかるけど、苦手なものは苦手で、もう一度やろうと言われたら全力

で拒否したいところです。そのようなことを言っても、いずれどこかでやることになるであろうことは分かっていますが。嫌なこともあったけどゼミ合宿は面白かったです。基本強制参加というところがなんとも言えないですが、みんなでワイワイ楽しく過ごせたのでよかったです。同じ苦勞はしたくはないけど、もう一度大学生活があるなら、怠け癖がつく前に単位をあらかじめ取得しておくべきだと思いました。長いようで短い、一瞬で過ぎた大学生活でした。

## 大学生活を振り返って

小林健太

あと僅かとなった大学生活。振り返ればいくつのも出会い、経験がそこにはある。

入学当初は希望に満ちあふれ、なんでもできる、これからが時代の幕開けといった意気込みがあった。しかし、日を追うごとにその意気込みは、膨大な時間とともに薄れていき、流されていった。私が掲げていた目標、例えば、英検 1 級を取得する、海外を放浪するといったものは、今現在において達成していない。それでも、大学生活において有意義であった出来事は多々ある。それらを経験して得たものがある。

まず、言いたいことは時間の使い方の難しさである。大学生活は 4 年間もあり、時間が膨大にある。この時間を有効に使えるかどうかで、有意義になるか否かが決まると考える。アルバイト、サークル、旅行などに費やすことも良いが、本気で取り掛からないと中途半端なものになってしまう。目標を定めて進んでいかなければ、味気のないものとなってしまい、学べるものを数少なくなる。時間を限りあるものと考え、自ずと有意義な結果を導けるはずである。

次に、行動に移すことの重要性である。頭で考えているだけではなく、行動に移してこそ実りのあるものになる。その結果はどうあれ、本人にとっては経験として刻まれ、頭だけで考えているよりも、遥かにマシである。「一度失敗したら二度と立ち直れない社会」や「失敗を恐れる若者」など言われているが、そのようにはなりたくない。なって欲しくない。話は逸れるかもしれないが、私は奨学金を借りて 3 年生から一人暮らしを始めた。それによって行動範囲が増え、数々の出会いを経験し、大学生活が数倍有意義なものになったと感じている。もし、一人暮らしという行動を起こさなかったら、今の楽しさは得ていないだろう。自己啓発本を 5、6 冊読んだが、共通している結果は「行動に移せ」ということである。

この 2 つの教訓を活かしていけば、今後の人生が有意義になると確信している。そしてこの思いを行動に移してこそ、本当の教訓になるのであろう。

## 4 年間で振り返った感想文

宇津木 卓司

私は大学生活を通して自分ではあまり自分は変わっていないと思っていましたが、こう

して大学 4 年間の活動を振り返ると様々な変化があると思います。高校生までは自分にとって興味のないことは徹底的に興味がなく見向きもしなかったのですが、今は他の人が興味を持った分野ならその興味に触れてみようかとチェックするようになり、大学に入ってから同級生でも大人でもこれまで以上に個性的な方に会うようになったので自分の中になるべく固定観念を持たないようにし、自分と違う考えや好みについて興味を持つようになりました。

次に、4 年間で最も自分にとって難しかったことは卒業論文の制作です。自分はこれまで国会図書館で資料を集め、それをもとにグラフを作り、文章を書いて一つの大きな論文を作るといったことをしたことがなかったのでとても新鮮でしたが、それと同時にとても面倒だ感じていました。ですが、完成したときの達成感もその分大きく、最後までやってよかったと思いました。これについては先生のアドバイスのもとに多くの資料を集めたのが役に立ったので、卒論で悩んでいる後輩にも自分と同じようにたくさんの資料を集めることを強く勧めたいです。内容面でも物事を関連付けて論理的に述べるということが身に着くので卒論を通して自分を大きく成長させることが出来たと思います。

就職活動も辛かったですが、自分の受ける企業や業界について調べ、活動を通して様々な企業の戦略についてしることが出来、その中で得たものは仕事をするときにも大きく役に立つと思っています。ですが、一つの内定を得るまでに 30 社近く落ちてしまい、酷く落ち込んだこともありました。あきらめない気持ちが大事だと感じさせられたと思います。

遊びでは自分は 1 年生の春休みにスノボーに行っていて以来、就職活動で忙しい 3 年生のとき以外毎年行くようになりました。高校生のころと違い、車を使えるようになったためであると思います。山をリフトで頂上まで登り、景色を眺めた後に滑り降りる瞬間がたまらなく楽しいです。また、車を使って行くため、雪道を運転してその危険を知ること自分の人生について大きな経験になったと思います。

最後に自分は今までサークル活動はしていないと言っていましたが、実は漫画研究会に所属しており、部誌を作る活動に参加していました。今まで言わなかったのはあまり自分の腕に自信がなかったからです。活動を通して他の人の絵を見る機会も多く、自分の描いた絵も次描くときはもっと良いものを描こうとするので物事に対する観察力が身に着いたと思います。こちらは卒業後もサークルの友達とともに創作活動を続けるつもりです。のでいつか上手くなったときに先生やゼミのメンバーにもお披露目出来たらと思います。

大学生活 4 年間を通して自分は論文の書き方を学び、就職先を決め、新しい趣味を持つことが出来、人として大きく成長出来たと思います。

## 感想文

金子 佳祐

長かった大学生活も残り少しくなりました。思えば、入学してから色々な新しい体験や挑戦をしてきました。アルバイトや欧州研修、サークル活動などどれも僕にとって良い思い出となっています。今回はその中でも一番得たものも多く自分に良い意味での変化のきっかけとなったゼミナールのお話をします。

藤井ゼミには大学二年生の時に入りました。志願書を書いたわりに、先生がテニスやアウトドアなことが好きだと知って、気が合いそう、などと入った理由は割と適当でした。授業の中では毎週課題が出て、毎回のように前日ぎりぎりにやっていた気がします。また、毎回の積み重ねを披露する他ゼミ、他大学との合同プレゼン会は自分の足をフルに使って動き、とても良い刺激になりました。

ただ、課題やプレゼンは大変ではありましたが、毎年セミナーハウスを借りてのゼミ合宿が一番好きな行事でした。合宿では怒られることも多々ありましたが、何より先生やゼミのメンバーとの絆が深めることが出来る最高の行事だと思います。

藤井ゼミでは辞めた人も多く、自分も一時期そういった考えを持ったこともありました。それでもゼミを辞めなかったのは、ゼミの仲間がいたからです。なにより自分だけ逃げるのは嫌と感じました。

今では藤井ゼミナールを続けて本当によかったと心から思います。先生はやらない人には厳しいですが、努力する人にも厳しかったです。たとえ結果が報われなくてもそれまでの過程を見て、結果すら褒めてくれました。初めのころは厳しいイメージと考えてることが分からないなど壁がある感じがしました。それでも3年間お世話になっていまの一番のイメージは「生徒一人一人をしっかりと見てくれている」と感じました。

ゼミに入ってから卒業論文を書き終えるまで、先生には本当に最後まで迷惑かけました。これからも先生は変わらずその授業スタイルを貫いてほしいです。今までありがとうございました。

## 藤井ゼミを振り返って

長崎 絢

大学の二年生から始まった藤井ゼミはあっという間に終わりました。藤井ゼミでは本当に多くのことを経験させていただきました。まず、最初に思い出すことは合同プレゼン大会に参加し、任天堂について発表したことです。日経テレコンからの新聞検索や雑誌記事検索、企業のホームページを探して情報を収集するという地道な作業に最初は戸惑いました。また、データの読み取りや言葉の伝え方など、苦労した点もありましたが、本番では満足のいく結果になったと思います。あのプレゼン大会が後の様々な経験に生きていたと思いました。

次に思い出すのは、三年生になってからの東京商工会議所による街づくりプレゼン大会です。グループに別れ、品川の町をターゲットに町おこしのアイデアを考えました。現地に何回も足を運んだり、地域の方にお話を伺ったりと、大変貴重な経験を積むことができたと思っています。結果は予選で敗退し、原因と考えられる「行動力の遅さ」「協調性の欠落」に現実を味わいました。やる気のない人たちをいかに動かせるか、ここに難しさがありました。しかし、後の他大学との合同プレゼン大会では、審査員奨励賞を獲得でき、リベンジすることができたので良かったと思います。

一番の思い出となるのは、ゼミ合宿です。三年の頃は合宿の係として企画もしてきましたが、やることをやってみんなで遊んで、仲間の絆が強くなったと思います。そして、な

かなか珍しいかもしれませんが、私と中島君が幹事としてゼミメンバーで卒業旅行に行ってきます。

ゼミ生活で唯一の後悔となるのが、何人かの仲間がやめてしまったことです。最後まで藤井ゼミの仲間として卒業したかったです。しかし、今いるメンバーは素晴らしく、就活の際も皆で情報交換しながら助け合ってきました。一生ものの仲間になると信じています。

藤井ゼミで多くの経験ことを経験させていただき、また、多くのご指導をありがとうございました。このゼミが大学生活一番の思い出となりました。ありがとうございました。

## 感想文

西尾 拓真

今回は藤井ゼミの感想文を書くにあたって、藤井教授にこの 3 年間お世話になったことに感謝いたします。藤井教授を初めて見た時の印象は一言でいうと厳しい人だと思いました。特に出席に関しては、他の友人が所属しているゼミの教授とは違って厳しいと感じました。しかし、この大学生活でバイトや就活、そしてゼミで藤井教授の指導を受けた経験で社会人になるにはいつまでも学生気分ではいられないという事が実感できました。頭ではわかっているけど実感できたのはとても重要なことだと思います。藤井教授にはいろいろお叱りを受けましたが、今思うとどれも社会人になるにあたってどれも大事なことだと思いました。この 4 年間で一番日本の経済について関わったのがゼミであると思います。授業でも経済学についていろいろ学びましたが、どれも黒板に書かれていることをノートに写す作業という印象しか持てませんでした。このゼミはテーマを決め、それをみんなで協力しそれをプレゼンすることにより他の授業より、より深く日本の経済について理解しやすかったです。また、みんなの卒論のテーマにアドバイスできる藤井教授の膨大な知識には素直にすごいと深く感銘しました。また藤井教授だけではなく、ゼミ内の仲間たちにも恵まれたと思います。最初が大学 2 年ということもあり、ゼミに入る時は不安でしたが今ではすっかり仲良くなり 2 月にみんなで卒業旅行に行くくらい仲が良いです。残念だったのはこの 3 年間で割と多くの方が藤井ゼミをやめたことです。彼ら、彼女たちともっと絡みたかったというのが率直な考えです。しかし、そういった辞めていった人達を目の当たりにしても、自分はこのゼミをやめなかったことを後悔していません。むしろ、ほんとに辞めなくて良かったと思います。卒論は結局間に合わず、最終的にゼミ論の提出という形でゼミの最後を締めくくりましたが、間に合わなかった自分が情けないです。社会人になるにあたってこの悔しさを忘れずに進んで行きたいです。今までお世話になりました。

## 大学生活を振り返って

小林 未奈

「人生の中で、最も楽しい時期は大学生の時だ。」と、私が幼いころから周囲の大人たちは口々に言っていました。当時は半信半疑でしたが、自分が大学生になり、ああ確かに。と納得しました。まさにバラ色の大学生活とはよく言ったもので、勉強する傍ら、時間的余裕ができ、自分の好きなこと興味のあることに対して猛進することができました。東京には、全国各地から様々な人々が集結しているので、同じ日本でもちょっとした文化の違いや、方言などに驚き、毎日が目新しくとても充実していました。

私が学校生活の中で特に懸命に打ち込んだのがゼミです。個人レポートから始まり、グループ対抗プレゼン、他大学対抗プレゼンと、取り組む課題がどんどんレベルアップしていくにつれて、自分自身も着実にレベルアップしていくのがわかりました。そのどれもが苦勞し、思うように進まない時にはさじを投げ出したい気分になりましたが、やり終えた後はいつも、やって本当に良かったと達成感に満ち溢れていました。そして、ゼミの総決算である卒業論文では、ゼミ活動 3 年間で得た力を存分に奮うことができました。この力は大学で学んだことの中で今後一番生かせるものだと思います。

楽しい時間というのはあっという間に過ぎるもので、大学へ入学してからの 4 年間は、中学校、高校の 3 年間よりもとても短く感じました。しかしその短く感じた 4 年間で多くの事を知り、多くのことを経験し、大きく成長を感じることができたと同時に、かけがえのない思い出を作ることができました。この 4 年間は、私の人生の中で貴重な財産ですと断言できるほどに価値あるものになりました。しかし、人生で一番楽しい時間はもう終わりだと考えて絶望しても仕方がないし、長い人生まだまだこれから、私は「明日が一番楽しい。いや、楽しくする。」の精神でこれからの毎日を過ごしていきたいと思います。ありがとうございました。